

# 後期デューイ思想における基本的概念

—「経験」と「探究」をめぐる—

錦 谷 光 臣

## 1 はじめに

デューイは、一般に今世紀初頭におけるアメリカ思想を代表するプラグマティズムの大成者と考へられている。そもそもパースによって創唱され、ジェイムズによって展開され、デューイによって体系化されたとされるプラグマティズムも単純に一直線上に展開されたのではなく、三者三様独自性を持ち、重複する部分もあれば、対立する部分もあることは言うまでもない。それは、各人における思想的な出発点も違えば、主要な問題意識、アプローチの仕方などかなり異なることを考えれば当然であろう。カント哲学の研究から始まり、「概念を明晰にする方法」を確立しようと論理学に専心したパース、生理学・心理学の研究から、ベルグソンをはじめ広くヨーロッパ思想との交流を通じ、独自の「経験」論を展開したジェイムズ、ヘーゲル研究から、進化論、さらにはジェイムズの機能心理学の影響を受け、広い分野にわたって「実験主義」あるいは「道具主義」の立場を展開したデューイ。こうしてみるとプラグマティズムとは、一つの大きな思想の流れであるとしても、パースはパースのプラグマティズム（自らはジェイムズによって広められたプラグマティズムの語を拒否してプラグマティズムという語を用いたが）が、ジェイムズはジェイムズの、デューイはデューイのプラグマティズムが存在すると言った方が妥当かもしれない。

このうち、パースとジェイムズは当初「プラグマティズム」という言葉が生まれる母体となった

「形而上学クラブ」と呼ばれたハーバード大学の哲学サークルの同じメンバーでありながら、パースはジェイムズのプラグマティズムとは訣別し、それ以降独自の研究を進め、両者は互いに影響しあうことは少なかつたと思われる。それに對し、デューイは自らの思想の基本的な部分をこの年長の二人から強く影響を受けたと言うことができよう。まずジェイムズからは、自らが述懐しているように、それまでのヘーゲルの思弁的な觀念論的傾向から脱却するきっかけとなつたジェイムズの『心理学原理』（1890）における機能的心理学、有機体と環境という基本的枠組み、さらには主観と客観とに分かれぬ「純粹經驗」を基底的抛りどころとする「經驗」の概念など、生物学的・心理学的側面における重要概念を受け入れ、發展させたと言える。他方パースとの關係においてデューイは、「探究」という方法とそれを中心とした論理学研究など彼の論理学から多くの影響を受けたと思われる。こうしてみると、デューイは、自らの研究においてジェイムズから心理学的側面を、パースから論理学的側面を受け継ぎ、それを自らの思想の中で総合し、發展させたと言えるのではないだろうか。

もとよりデューイにおいては、初期のヘーゲル主義が彼の思想の根底を流れている一方で、ロックに始まり、ミルの功利主義、グリーン理想主義と続くイギリス經驗論の流れが、彼の思想の基本的な背景となつてゐることは否定できない。しかし、デューイの独自の思想に直接的な影響を与えたのは、やはりジェイムズの根本的經驗論であり、「經驗」の概念であつたと思われるのである。なぜならデューイが「実験主義」あるいは「道具主義」という独自の立場を確立したと言われるのは、ジェイムズの『心理学原理』が発刊された一八九〇年以降であり、それによつてデューイはプラグマティックな認識理論のみならず、ジェイムズの機能心理学にもとづく基本的立場に大きく影響されたと思われるからである。特に「經驗」の概念は、初期のヘーゲル主義的立場から道具主義的立場への轉換後、論理学、倫理学、教育理論、芸術論、宗教論などの彼の広い研究領域において重要な位置を

占めているのである。

他方、デューイは比較的早い時期から「学の方法」としての論理学の研究にも力を注ぎ、プラグマティックな認識理論に論理的な基礎づけを行い、体系的な学の方法論を確立しようとした。そもそもデューイにとって、論理学とは伝統的な形式論理学にみられるようにおもに概念及び命題とその関係を記述する学ではなく、広く学問一般の方法論として、さらには認識の発生的過程を含む「探究」の学であった。『論理学理論の研究』(1903)・『思考の方法』(1910)・『実験論理学論集』(1916)を経て、論理学研究の集大成とも言える『論理学—探究の理論』(1938)はまさに「探究」を体系的にまとめようとしたものである。そして、この「探究」という概念は、パースが『概念を明晰にする方法』(1877)という論文の中ですでに言及しているのである。二人の思想的出発点の違い(パースはカント哲学から、デューイはヘーゲル哲学から出発した)もあり、デューイは当初パースの「探究」の概念にあまり関心を寄せなかつたにもかかわらず、自らの論理学の立場を確立したと言われる『論理学的理論の研究』以降、急速にパースに接近しており、パースの論理学的側面における影響は大きかつたと思えるのである。

このようにみると、デューイは、生物学・心理学的側面においてジェイムズから、論理学・方法論的側面においてパースから直接的な影響を受け、それらを土台として自らの思想を展開したとも言えるのではないだろうか。もとより、プラグマティズムを代表する三人の思想は、それぞれ独自性をもっており、思想的な流れとして簡単に図式化できるわけではないが、大まかな見方をすれば、パースとジェイムズの間でデューイの中で継承され、独自の発展をみたとと言えるだろう。特にジェイムズからの「経験」の概念とパースからの「探究」の概念は、デューイが自らの立場を展開し、確立した後期のデューイ思想の基本的な概念であり、デューイ哲学の理解にとって重要な位置を占めるものである。

と思われる。従つて、以下デューイにおける「経験」と「探究」の概念を辿ることによつて、後期のデューイの基本的立場を検討してみたいと思うのである。

## 2 「経験」の概念

もとより、デューイは当初から「経験」の概念をジェイムズから受け入れ、発展させたわけではないと思われる。それまでのヘーゲル主義的立場からの思想的転換のきっかけとなつたとされるジェイムズの『心理学原理』の刊行された一八九〇年以前において、デューイはヘーゲルの絶対主義的立場から、「主観―客観」の二元論を克服するための独自の基本的論理の中で「経験」をとらえようとしていたと言われる。デューイはヘーゲル主義的な有機体説に新しい実験心理学の方法を導入した「新心理学」を構成し、人間の経験を包括にとらえようとしたのである。さらにデューイにおいて初期から中期への思想的転換期となつた一八九〇年前後において、デューイの中に有機体説にもとづく「経験」の概念は構想されており、ジェイムズの「経験」の概念がそれに生理学的・心理学的基礎づけを与え、確固たるものにしたのではないだろうか。それはデューイの中にジェイムズの「経験」の概念を受け入れる素地ができていたからこそ、自らの思想を革新するほど大きな影響を受けることになつたと思われる。すなわち、デューイの初期における「経験」概念はヘーゲル主義を基調としながらも、実験的な心理学との結合によつて構想されたものであり、有機体説という基本的な枠組みが、ジェイムズの機能主義的な心理学との接点をなし、「経験」の概念を受け入れる大きなきっかけとなつたと思われるのである。

それでは、ジェイムズの「経験」とはどのようなものだったのであろうか。そもそもジェイムズは心理学者として、当時のドイツの心理学、特にヴントの要素的傾向を批判し、意識は比較的静止している部分

を含みながらも、絶えず流動しており、この「意識の流れ」こそ心理学の対象であるとした。ジェイムズにおいて、この意識状態は有機体とその生物的環境との関係における全体的な物理学・心理的機能として把握され、それは「直接経験」としてとらえられるのである。この「経験」の概念は、主観と客観とに分離していない「純粹経験」とされ、心理学のみならず、彼の「根本的経験論」の基底をなすものである。ジェイムズによれば我々の経験においては、独立した項がバラバラに与えられるのではなく、それらは項と項との関係を含めて全体として直接に経験されるのである。経験論も合理論も、我々の経験的認識を十分説明し得ず、経験の真相を反映していないのである。これに対してジェイムズは純粹経験を重視し、それに徹することによって経験の真相、すなわち生きた経験に触れることができると考えたのである。ジェイムズにとって、主観と客観、精神と物体との分裂以前の純粹経験こそ真の实在であり、その思想はベルグソンの「純粹持続」に通ずる「生の哲学」とも言えるものだろう。

従って、ジェイムズの哲学思想は、絶対主義的・主知主義的なドイツ観念論とは対立するものであり、相対主義的・反主知主義的立場に立つものであった。その意味でジェイムズの立場は、ヘーゲルの絶対主義の立場に立っていたデューイとは相容れないはずであるが、有機体説をもとにしたデューイの新しい心理学の構想が、ジェイムズの経験論における有機体と環境という基本的な枠組みと合致したのではないかと思われるのである。それゆえに「ジェイムズの影響は私の思想の中に一つの新しい方向と質を与えるほどに入り込んだ一つの明記できる哲学的要因だった。」とデューイが自ら述懐するように、彼に決定的な影響を与えたといえるのである。

このようにジェイムズの経験論がデューイの「経験」の概念に大きな影響を与え、それ以降のデューイの思想の基本的概念となるが、デューイ自身において「経験」はどのように述べられているのだ

ろうか。

そもそもデューイにとって人間といえども生命有機体にはかならず、それは環境との相互作用によって存在しうるものである。すなわち人間と自然とはそれぞれに対峙した独立の存在ではなく、相互に連関し、連続した存在である。そして、デューイによれば、この人間と自然との相互作用こそ「経験」にほかならないと言えるのである。すなわち、「経験は為すこと(doin)と受けること(suffering)の同時的な事柄にほかならない」<sup>(4)</sup>のであり、「為すことと受けることの密接な結合が我々が言う経験を構成する」<sup>(5)</sup>と述べられるのである。つまり、デューイの言う「経験」は能動と受動の両側面をもち、それはまた何よりもまず知識の事柄ではなくして行動の事柄である。従って「経験とは、生きることを意味する」<sup>(5)</sup>、あるいは「経験とは、生命過程そのものである」<sup>(6)</sup>とも述べられるのである。

このようにみえてくると、デューイにとって「経験」の概念はきわめて広い意味をもっており、人間の「生」そのものを指していると思われる。もとより、人間を生命有機体としてとらえることは、その活動全体すなわち知識や行動を含んだ人間の生そのものを問題にすることにほかならない。それは伝統的な近代哲学が人間を精神的存在ととらえることによって必然的に「知ること」すなわち認識を中心的問題としたことと対比的である。近代哲学(特にイギリス経験論)において、「経験」とは感覚とおしての人間と自然との直接的な接触を意味した。それも自然から人間へ一方向的な作用に限定されたものであった。すなわち、人間の側から言えば、「経験」とは自然の側からの受動的な強制的な作用であり、それも認識上の概念に限られたものであったと言える。デューイは、このような感覚的経験は、それ自体では脈絡をもたない部分的な概念であり、感覚作用も有機体の全身的な活動の一部である以上、それだけを取り出して考えることは、実際の生活の脈絡の中では不自然なものであると考へた。これに対して、デューイ自身は「経験」を有機体と環境との相互作用として、すなわち

人間の生そのものとして、より広い地平でとらえられていこうとしたと言えるだろう。

ところで、デューイにとって「環境」という語は「自然」という語と同義ではない。「自然」は「環境」よりは広い概念であり、それはもともとは有機体とは独立に存在するが、有機体との相互作用において「環境」となると考えられている。すなわち「自然界は有機体とは独立に存在するが、この世界は直接または間接に生命の働きの中に入って初めて環境となる。有機体自身は自然界の一部であり、環境との活発な結びつきにおいて初めて有機体として存在する。有機体と環境との相互作用 (interaction) ということで示される区別よりも統一 (integration) ということが重要である。」と述べられるのである。ここでデューイは、人間と自然を有機体と環境という連続した枠組みでとらえ、両者の関係を単なる相互作用であるよりは、むしろ密接な統一的連関をもったものと考えている。さらに、「有機体の生命は、とにかく一つの活動過程であって、一つの環境を含んでいる。その活動は、有機体の空間的限界を越えた取引 (transaction) である。有機体は環境の中で生きているのではない。それは環境を手段として生きている。」<sup>(15)</sup>とも述べられる。例えば、呼吸という活動を例にとってみた場合、有機体は酸素を吸収し、二酸化炭素を排出するという環境との間に物質的な取引とそれに伴うエネルギーの取引をおこなっているわけである。このように有機体と環境は物質とエネルギーの取引をしながら、バランスのとれた連関をなしているのであり、この両者の統一的連関こそデューイにおける「経験」にはほかならないと言える。

ところで、デューイにおける「経験」の概念は、あくまで有機体と環境という関係で述べられているが、それは生物学的側面からのアプローチであって、一見、人間独自の観点が言及されていないようにも思える。しかし、デューイにとって環境とは物理的なものだけでなく、社会的・文化的なものでもあり、これらは環境として一体となったものであり、他方有機体についても、それは物理的な身体

だけではなく、精神をも含んだ統一体と考えられている。すなわち、デューイにおける有機体と環境という枠組みは、統一的連関をもった人間と自然の関係にはほかならないと言える。ただ、人間を基本的には生物としてとらえるという生物学的自然主義が、デューイ思想における基本的前提であることは否定できないこともある。

そもそも、デューイの「経験」についての考え方の背後には、精神と物体、主観と客観という近世哲学の二元論に対する批判があったことを忘れてはならない。デカルトが「思惟するもの」として「精神」を「物体」から分離し、それらを二実体と規定してから、近代哲学はこの物心二元論の前提のもとで展開されてきたと言える。しかし、この二元論のもとで自然科学はますます宗教・芸術・道徳などの精神的なものとの距離を広げ、それに伴う弊害さえも生じるようになってきた。それは自然科学の固有の論理に原因をもつのではなく近代哲学の前提である二元論によるのだとデューイはみなすのである。精神的なものとは物質的なもの、人間的なものとは機械的なものという対立でとらえる二元論は、近代以降における人間疎外や社会的な諸問題を生みだしてきたのであり、この二元論の克服こそデューイ哲学における一貫した課題であったと言えるだろう。

### 3 経験と経験的方法

ところで、デューイは「経験」を直接的な生の経験である「一次的経験」とこれに対する反省的経験としての「二次的経験」とに分ける。デューイによれば、一次的経験は粗雑で大まかな日常経験であり、二次的経験はこれに反省考察を加え、精錬され体系づけられた知的経験である。この二つの経験は、あくまでも連続したものであり、また機能的な分類によるものである。つまり、二次的経験は一次的経験から抽象され、分析された反省的経験と考えられる。デューイによれば、この二次的経



験においてはじめて「主観」と「客観」の分離がおこなわれることになる。客観的に存在している我々が考える対象は、デューイにおいては二次的経験である反省考察において分析的に考えられたものなのである。また「客観的なもの」を抽象することは、同時に人間とその行為を選び出すことであり、「主観的なもの」を認識することでもある。

このように、近代哲学の大前提であった「主観―客観」という枠組みは、デューイにおいては、もともと二次的経験の分析的性質によって形成されたものとみなされる。そして、デューイはこの前提をまったく否定するのではなく、それは科学の発展や個人主義の勃興という近代における時代の要請によるものであったと受けとるのである。近代哲学の二元論に対してデューイはつねに批判的であり、それがデューイ哲学の原点でもあったが、それは彼の批判が、本来二次的経験という分析的過程において現れる「主観―客観」の枠組みを近代哲学が一次的経験におけるものと考えた点に向けられていたからであらう。デューイによれば、伝統的な近代哲学は一次的経験の事物を純化し、分析し、組織立て、改造する二次的経験を重視するあまり、日常の生の経験すなわち、味わう、楽しむ、鑑賞するという一次的経験の特性は失われ、感覚や印象や感情の複合体として以外にその存在は否定されたのである。その結果、近代哲学においては、一次的経験から離れて思考活動を分析する認識論が大きな位置を占めるようになったのだとデューイはみなすのである。

ところで、デューイの「経験」の概念とは、日常の人間の生そのものを指す一次的経験にほかならないと考えられるが、そこにはデューイ流の実存的傾向が指摘できるのではないだろうか。もちろん、それは実存主義における「実存」とは、かなり意味合いを異にするとしても、主知主義を批判し、人間の生の原点に立ちかえろうとする点において共通点を持ち得ると思えるのである。そして、もしデューイの「経験」の概念の中に、実存的傾向が認められるとすれば、それはジェイムズの「純粹経験」

から多大の影響を受けているのではないだろうか。ヨーロッパの思想と広い交流をもったジェイムズが、「生」の哲学者ベルグソンと深いかわりを持ち、互いに影響を及ぼし合ったことを考えると、ジェイムズの「経験」における実存的傾向が、デューイの「経験」の概念に大きく反映されているという見方もできよう。

ただしジェイムズの「経験」の概念は、彼の代表的著書である『宗教的経験の諸相』（1902）においてみられるように、反主知的傾向が強く、宗教的な経験と結びつき、むしろ形而上的な意味合いを帯びるものであったのに対し、デューイは一次的経験において人間の生を重視する一方で、反省作用としての二次的経験における知性の働きにも十分な重要性を認めていると言える。デューイにとって一次的経験は人間の生の基本的な姿であるが、それだけを問題にするのであれば、「全体的な分析されていない世界は、なかなか容易に制御することはできないのであり、むしろ反対に、あたかも運命に屈従するように何ものに対しても人間はそれに従属させられるように見えることは明らかである<sup>(5)</sup>」ということになる。デューイは、ここで「人間の行動や状態に基づくものとして事物の性質を抽象することこそ、事物の支配する立脚地である。」<sup>(6)</sup>と考へ、二次的経験の重要性を認めるのである。すなわちデューイにおいて、一次的経験は人間の生の基本的な状態であり、人間と自然との密接な連関を示すものであるが、さらにその一体となった関係を引き離すことによって、その関係を変化させ、新たな経験の可能性を探るという二次的経験の必要性が説かれることになる。

しかし、この二次的経験は最終的にはさらに一次的経験の中に立ち戻って初めて、その役割を果たすものと考えられる。なぜなら、デューイの叙述に従えば、「二次的な対象である精錬された事物が方法として、またそれに立ち帰る道として用いられる時、それらの性質はもはや、ばらばらの部分的な細目ではなくなる。それらは関係づけられた全体系の中に含まれる意味 (meaning) を得るようになる。」

自然の他の部分と連続したものとなり、今やそれらのものが連続していると見られる事実の本領を現すようになる」<sup>(1)</sup>からである。一次的経験を反省考察して二次的経験が生じ、さらに一次的経験に立ち帰る。これをデューイは「経験的方法」(empirical method)と呼ぶ。デューイによれば、この経験的方法は、自然科学が用いてきた方法であり、これによって科学は多大の成果を上げてきたのである。科学と哲学は、ともに二次的な反省考察でありながら、この経験的方法を用いるかどうかで著しい差異を生じてきたのであり、哲学もこの経験的方法をとることが要請されるのである。哲学は、一次的経験における人間像から血と肉を削り落とし、その骨組みだけを二次的経験の対象とする抽象や普遍に集中し、そこに实在性を求めてきたのであり、その結果、哲学は人間の日常生活とは没交渉のものとなってきたのだとデューイはみなす。その意味で、哲学はますます経験的方法を用いることが要請されることになるかとデューイは主張する。

このように、デューイにおいて「経験」とは人間の自然との統一的連関をもった相互作用であり、それは人間と自然との媒介をなすものである。従って人間と自然は、経験をとおして連続しており、人間は経験をとおして自然に接近し、とらえることができる。そのためには日常的経験たる一次的経験から、そこに反省作用による二次的経験を形成し、さらにその成果を一次的経験に立ち戻って検証するという経験的方法がとられなければならない。このようなデューイの立場及び方法は、自らが称するように「経験的自然主義」<sup>(2)</sup>と言えるものだろう。

#### 4 経験の再構成としての「探究」

ところで、デューイの「経験」の概念は、人間と自然とを有機体と環境という基本的な枠組みでとらえるという点で生物学的側面をもっていると同時に、独自の人間観、自然観にもとづいた「自然形

而上学」とも言える側面も見られる。特に彼の自然観は、自然科学における「自然」とは違った意味あいを持つている。すなわち、それは物理的自然に限らず、より広い概念であり、宇宙全体を想起させるような形而上学的なものであるとも言える。

そもそもデューイにとって、自然は危険と不安定を含む変化の世界であり、人間にとって自然とは成功と失敗、幸福と不幸、明と暗の源泉と考えられている。「自然の諸条件と諸過程は、自然が危険に対して安全と保障の手段を提供すると同じくらい真実に、不確定とリスクを生み出す。自然は不安定なものと安定したものととの絶えざる混合物である。」<sup>113</sup> というデューイの自然観は、少なくとも一般に言われるほど楽観主義的なものではない。デューイによれば、自然が「安定したもの」と「不安定なもの」をともに含んでいるからこそ「安定したもの」を求める探究が生じるのであり、逆に、もし自然が合理的秩序として固定したものであれば、探究心は起こりえないことになる。しかし、自然はつねに時間とともに変化し、安定したものも必ずや不安定な不確定なものになる。従って、人間と自然との媒介的存在である経験も、時間の経過にもなつて変化し、過去の経験はその後の経験と相容れないものとなつていく。一つの経験は、新しい経験に直面した時役に立たなくなるかもしれない。しかし、デューイによればこの変化は全面的なものではなく、古い経験は新しい経験と結合されることによつて部分的に生かされる。つまり、ここで経験は再構成されることになる。このようにデューイにおいて経験は、時間内に連続したものであり、絶えず再構成され、それ自身も自律性をもつた固有の運動をするものであると考えられるのである。

このような経験の再構成は、前述の反省的な二次的経験の過程においてなされるが、デューイはこの反省的思考活動を「探究」(inquiry)と呼ぶ。デューイの自然観に従えば、自然は絶えず変化し、人間と環境との間の均衡はくずれ、人間は環境との相互作用の平衡を回復することが要求されること

になる。しかし、この平衡の回復は、元の古い関係に戻るのではなく、新しい平衡関係をつくり上げるのである。有機体が環境との均衡を回復することは「適応」(adjustment)と呼ばれるが、デューイにおける「適応」とは、単に環境に適合することではなく、環境との関係を変化させ、新たな関係をつくり上げるといふ積極的な面をもつものだとと言えるだろう。

ところで有機体と環境との関係は絶えず変化するといっても、両者には比較的安定した状態も存在する。デューイにおいて、この安定した状態とは、両者間にエネルギーの不均衡と緊張のない「閉じた」相と考えられ、この均衡した状態における統一された相互作用は「習慣」(habit)と呼ばれる。すなわち「習慣」とは、安定した均衡のとれた経験であると言える。この「習慣」は、一般に解されているような固定化した規則的な行動を指すのではなく、有機体と環境との相互作用において形成された行動のメカニズムというべきものである。デューイによれば「習慣」は、もともと柔軟性のあるダイナミックなものであるが、それが固定化された時いわゆる「習慣的」な行動がみられることなのである。すなわちデューイにおいて「習慣はくり返しによって形成される」という意見は本末転倒である。くり返すことができるのは行動が完成し、終了する段階に達して、その有機体の性向が変わり、習慣が形成された結果である。<sup>14)</sup>と述べられるのである。

このように、デューイによれば、有機体が安定した状態に立ち至るのは、新しい均衡のとれた「習慣」が形成された時である。しかし、この「習慣」は環境との相互作用によって形成されたものであり、本質的にダイナミックなものである。それゆえに、均衡のとれた安定した状態は、つねに不安定な状態になる可能性を含むものである。有機体にとって環境はたえず新たな対応をせまるものである。有機体が習慣的な行動のパターンを形成し、環境との均衡のとれた状態に移行できても、それは永続せず、再び不均衡な状態に立ち至るのである。そこで有機体は、この不均衡な状態から再び均衡を回

復し、安定した状態に戻ろうと模索することになる。そして、この模索こそデューイの述べる「探究」にはかならないと言えるだろう。すなわちデューイにおいて、「かつては安定していた調和が妨害されて、不確定な、もしくは疑わしい状態から探究が発生し、しだいに探究そのものに変わる。」<sup>15)</sup>と述べられるのである。

そこでデューイは、「探究」を不確定な状況から確定した状況への変容であると規定する。ここでいう不確定な状況とは、あいまいな、混乱した状態であり、探究の先行条件となる。この状況の不確定さは、デューイによれば、単なる心理的なものでなく、客観的な実在的なものに起因するのである。もともと、不確定な状況とは我々と環境との相互作用の平衡がくずれたために生ずるのであり、それは環境という客観的な存在とかかかわることからその客観性、実在性は当然帰結されることになる。ただし、先行条件としての不確定な状況は、知的には認識されず、情緒的な段階にとどまっております。それが明確に問題として受けとめられた時、「探究」が始まることになる。

デューイは、「探究」の過程を明確に定式化しているとは言えないが、『論理学』における叙述に従うと、ほぼ次のような過程にまとめることができよう。(一)疑問を生ぜしめる問題状況、(二)問題の設定、(三)問題を解決するための仮説の提案、(四)推論による仮説の再構成、(五)実験と観察による仮説の検証。デューイにおいて、これらの過程は必ずしも時間的な系列において経過するのではなく、互いに重複したり、省かれたりすることから、「探究」の段階というよりも相と考えられている。つまり、デューイは、「探究」の過程を固定化した時間的系列としてではなく、よりダイナミックなものととらえているのである。

この「探究」の過程は、観念と事実との協働によって展開されていると言える。もともとデューイにとって、観念も事実も探究の活動の外に存在するのではなく、不確定な状況において環境との間の

平衡がくずれ、疑問が生じた時に、探究する働きと探究されるべき対象として現れることになる。つまり、事実と観念は、探究が始まった時に現れ、探究の対象と働きとして区別され、与件と観念、主観と客観の区別としても現れるのである。デューイにおいて、観念と事実は機能的な区別にすぎないが、それらはそれぞれ「操作的」な役割をになつていて考えられる。すなわち観念は観察を指導し、それによって得られた事実を整合的な体系の中に位置づけるという働きをもち、その結果、事実は観念によって導かれ、組織づけられて始めて「意味」(meaning)を持ちうるものとなる。他方、事実は観念の意味を指示し、それを検証する働きを持つ。事実は、それだけで働くわけではなく、観念と相互的に機能しあつてこそ、その能力を発揮する。このように観念と事実は相互に作用しながら、探究を進めていく。その意味で両者の協働作用は、探究の過程を貫く論理的構造をなすと言えるだろう。

また、事実と観念を生み出す操作の面から言えば、「探究」は観察と推理との協働であるとも考えられる。「探究は、不確定な状況を統一された状況に、方向づけられ、統制された仕方で変容する」とである。その変容は機能的に対応した二種類の操作によって達せられる。操作の一つは、観念的、概念的な素材を取り扱う。他方の操作は、観察の技術や器官を含む諸活動から成り立っている。<sup>(10)</sup>このように、「探究」は、きわめて操作的な認識活動であり、一つの実験的行為であると言える。実験とは、事実と観念の相互作用であり、観察と推理の二種類の操作により、試験的に活動をコントロールしていき、一つの客観的な結果を導く行為とみなされる。その意味で、「探究」の論理は、実験の論理に対応するものであり、「探究」は広い意味で実験そのものであるとも言えるだろう。

## 5 実験的経験主義

デューイによれば、以上のような探究の過程を経て、確定した状況が実現した時、知識あるいは信

念と言ふべきものを獲得することになるが、それはあくまで最終的なものではなく、再び新しい探究の「仮説」として働く「保証された言明」(warranted assertion) にすぎない。なぜなら、「探究」によって、不確定な状況が確定された状況に変容されても、それは新たな不確定な状況の始まりであつて、絶対的な安定した絶対的な安定した状況ではあり得ないからである。探究の過程において得られた知識は、あくまでも、その一つの過程における知識であり、その時に保証された知識であり、その絶対的真理を主張することは不可能である。近代科学において絶対的真理とされ、哲学においても大きな理論的支柱となつたニュートン物理学でさえも、アインシュタインの相対性理論の出現により、その完全性・絶対性は主張しえなくなつた。しかし、デューイにおいて、知識はすべて相対的であり、一時的なものと考えられたわけではない。一つの探究の結果得られた知識は、さらに新しい探究を導き、それによって真偽が確定する。つまり、知識は連続したものであり、新しい探究により発展し、成長するものととらえられる。デューイにとって知識とは、一つの探究の結果得られたものであつても、それはその場かぎりの相対的なものではなく、新しい探究における仮説として働くと同時に、それ自身洗練され、発展していくものと考えられているのである。

ややもすると主観主義的・相対主義的なジェイムズの真理観に対して、デューイはあくまで知識の客観性を重視していこうとする。デューイの「探究」は実験主義的な科学の論理であり、それを科学のみならず広い領域における学の方法論として、より客観的な知識を獲得していこうとする行為であると言える。デューイは、科学を否定するのではなく、むしろ科学の実験論理の中に、広い意味での科学的方法を見出し、それを社会科学や倫理などの人文科学に広く応用しようとしたのである。その意味で、「探究」という概念は、デューイの論理的・方法的側面において重要な位置を占めるものである。そして、この「探究」の概念及び科学的方法に関してパースの影響はきわめて大きい



と言わざるを得ない。デューイは、『論理学』の序論の中に次のように述べている。「パースの論理学に関する著書になじんでいる読者ならば、私がこの書物においてとっている一般的な立場が、パースに負うところが非常に大きいことに気づかれるだろう。私の知る限りでは、彼は探究とその方法を論理学のテーマの究極の源泉とみなした最初の論理学者であった。」<sup>(1)</sup> 厳密な科学的方法を分析し、確立することを終生の研究課題としていたパースの「探究」の概念は、デューイの論理学的側面に大きな影響を与えたと同時に、デューイによって生物学的・心理学的な説明を加えられ、より広範囲な概念に発展され、体系化されたと言えるだろう。

デューイにおいて、自然主義的な「経験」の概念と論理学的な「探究」の概念は、総合・発展され、デューイの後期の思想の基本的立場である「経験的自然主義」あるいは「実験的经验主義」を形成したと思われるのである。その意味でデューイは、ジェイムズから「経験」の概念における自然主義的思想、さらには「生の哲学」にも通ずる実存的傾向を、他方パースからは「探究」の概念における科学的方法論及び論理を自らのうちに継承し、発展させたとも言えるだろう。デューイの目指したのは、日常の生活の中で科学の成果と方法を積極的に取り入れながら、實在の世界との密接な関係を発展させ、豊かな経験を培っていくであり、それこそ科学時代における実存的な「生」を示唆するものではないかと思われるのである。

## 註

- (1) 亀尾利夫『デューイの哲学』六二ページ
- (2) "John Dewey, From Absolutism to Experimentalism," in Richard Bernstein (ed.), pp. 15-16

- (3) J. Dewey, Creative Intelligence, 1917. Henry Holt and Company, P.11
- (4) J. Dewey, Reconstruction in Philosophy, 1920. Henry Holt and Company, P86
- (5) J. Dewey, Creative Intelligence, P.7
- (6) J. Dewey, Reconstruction in Philosophy, P.90
- (7) J. Dewey, Logic: The Theory of Inquiry, 1938, in The Later works, Vo1.12, P.40
- (8) ibid, P.40
- (9) J. Dewey, Experience and Nature, 1925. in The Later Works, Vo1.1, P22
- (10) ibid, P.22
- (11) ibid, P.16
- (12) ibid, P.10
- (13) J. Dewey, The Quest for Certainty, 1929. in The Later Works, Vo1. 4, PP.243-244
- (14) J. Dewey, Logic, P39
- (15) ibid, P40
- (16) ibid, P121
- (17) ibid, P.3

(※本稿は、一九九〇年四月二八日に開催された第二五回弘前大学哲学会大会における研究発表の草稿をもとに、その後若干の考察と訂正を加えてなったものである。研究発表の機会を与えて下さった関係各位に感謝申し上げます。)